

演劇団S.O.プロデューサー

朗読劇・DOZEN【ダース】3rd

作・藤田 ヒロシ

0	1	いつか止まる
0	2	私の覚悟
0	3	笑顔の行方
0	4	シユミレーション
0	5	二人の約束
0	6	「本気」始める
0	7	小悪魔のささやき
0	8	抑揚のない声
0	9	らしく
1	0	方針転換
1	1	軽はずみ
1	2	アナウンス

## 01 いつか止まる

永遠：そんなものが存在するのか、それはわからない。命はもちろん、トキメキも苦しみも、清々しい朝も深く寒い夜も、必ず終わりは来る。この星も太陽にも終わりがある。そのことを思えば「答え」は「ない」でいい。しかし、時間はどうか？と、問われると困ってしまう。

それは淡々と進んで行く。その中で、あまたの終わりを生み出している。

それは永遠なものを永遠に生み出さない、永遠の流れ。その中で、あまたの始まりを生み出している。

この星がくるつとターンして、ハイそれが一日。仮にこれを「1パロ」と呼んだところで、起きている事象に変化はない。1時間を「1キュン」としても同じことだ。

「1パロ24キュン」ちよつと滑稽に聞こえるが、それは「1日24時間」に慣れてしまっているからであって、「パロ」や「キュン」そのものが滑稽であるというわけではない。

呼び方はどうであれ、好む好まないはどうであれ、終わり始まりを繰り返して、そこからは逃れられない。永遠に。

今は16キュン24ゾン。彼はまだ自分だけにしか通じない呼び方で時間を確認した。「まだ」とは言ったが、きつとこの先も彼にしか通じない。そう、永遠に。

ふあああ―深呼吸とため息の間のような息を吐いて、くだらなくも楽しい思考を終わらせて、目の前の作業に集中した。

小さな竜頭を摘み出し、確認した。パケ：いや、時間に向けて針を進める。わずかではあるけれど、引っかけりを指先が感じ取った。それをより確かに感じるために、目標の位置を過ぎても竜頭を回し続けた。やはり、引っかけりがある。

57、58、59―彼は作業台の上に置かれた時計を見つめながら竜頭を戻し、秒針が動き出したことを確認して、ふあああ、とまた深呼吸とため息の間のような息を吐いた。

「お預かりの時計ですが電池交換して動きの確認はできました。今は16キュン：16時38分。この10分くらいは正確に時間を刻んでいます。もしかするとこの先、遅れが出たり、止まったりする場合があります。こちらの時計はご使用されて長いかと思いません。これまでに分解掃除をされたことはございますか？」

彼はそこで手にしていた腕時計から視線を上げ、その持ち主の女性を見た。清潔感のある髪型とメイク。白い肌と一重のすつきりとした目。こういう女性を「透明感がある」というのだろうか、と彼は感じた。その女性は、彼の質問に小さく首を曲げた。

「分解掃除の有無はわからない」ということだろう。彼の想定範囲であった。落ち着いた容姿とは言え、20代であることは間違いない。その女性がこの腕時計を初めから使っていたとなれば、それはどんなに遅くとも「歩き始めた頃から」ということになってしまふ。それ位の年月を刻んできた腕時計だ。

「どなたかから譲り受けたお時計ですかね？」

女性が小さく頷いたことを確認して、彼は続けた。

「腕時計は部品の劣化や油切れで動きが悪くなってきました。電池さえ交換すれば永遠に使えるわけではありません。今はまだ動いています。この先遅れや止まりが生じることが十分に考えられます。それを改善するには分解掃除というものを行う必要があります。費用的には決して安くはないですが、こちらのお時計の価値や譲り受けた物であることを考えると、一度ご検討してみてはいかがでしょう？生産からの年月が経てば経つほど部品の入手が困難になり、修理不可能となる場合もあります。まだ動いている今のうち一度メーカーに送って見てもらうほうがいいかと思います」

彼は持ち主の女性を見ながら、説明をした。そして、言い終えると同時に、まいったな、と心でつぶやいた。女性が彼の言葉に何も反応を見せなかったからだ。ただただじっと、彼の前に立ち、腕時計を見つめていた。

「それでは今の内容を簡単に書いたものをお渡ししますので、ご一緒にお持ちください」

人は忘れる生き物である。ある種、その忘れるという能力はとても大切な力である。悪いことではない。でも…だからこそ、常に忘れるという可能性を忘れないといけない。ない。

以前、彼はこんな経験をした。そのお客はまず店自体を勘違いしていたが、彼と目が合うなり「おたくで修理してもらったんだけど、同じところがまたおかしい。どうなっているんだ！」と、腕時計を突き出してきた。その特徴的なデザインを見た彼は、その客の勘違いであるだろうと瞬間的に思った。

それでも、いやだからこそ彼は丁寧に修理明細兼保証書を持っているかどうかを訪ねた。その見本を提示して。ただそれだけのことだったが、客はひどく感情的になり、そんなものを貰っていないと言いつつ放った。

そりゃ、そうだー彼は心でつぶやいた。客が突き出した腕時計。そのブランドは彼の店では修理受付を行っていないブランドだったのだ。

「よくわからんが、カードみたいなものを貰った」と客は一枚のハガキサイズのカードを取り出してきた。そこにはメンテナンスカードの文字とブランドロゴが印刷してあった。

そして、修理内容とその保証に關しての記述が。

「交換部品廃番につき、限定修理。保証なし」つまり、本来は部品交換が必要だが、その部品がすでに製造させてなく入手できないので、とりあえず動くように調整はしましたがまた不具合ができる可能性があります。よって今回の修理に対して作動保証は付けられません。ということである。

彼はそれを受付店舗のスタッフでもないのに説明した。それを聞いた客は「君みたいにそうやって説明してくれたらよかったんだよ」と、投げ捨てるようにして去って行った。

説明しただろ。それに書いてあるだろ、読めよ―彼は、心でつぶやいた。受付店舗は彼の店よりも1ランクも2ランクも上の店舗だ。スタッフ教育もマニュアルも徹底しているはずだった。

もちろん、忘れた可能性はある。人は忘れる生き物である。スタッフも客も人間だ。常に忘れるという可能性を忘れないといけない。

「それではこちらを一緒にお持ちください。何かあればお気軽にご相談ください」

差し出された修理明細書と腕時計を手にして、女性は小さく頭を下げた。こういう女性を「透明感がある」というのはちよつと違うな、と彼は考えを変えていた。そして、その後ろ姿に、半年後「ここで電池交換したんですけど、すぐに止まりました。どういうことですか？」と、言ってくる第一印象とは全く異なる姿を想像していた。

## 02 私の覚悟

淡い期待でしかなかった。むしろ、駄目だろうと思っていた。

祖母の机の引き出しから出て来た見るからに年代物の腕時計。それを付けていた姿がおぼろげに私の中に残っていたが、それが祖母にとってどれほど大切な物なのか、どれほどの価値なのか、それは全く知らない。

「物を買うときは少々の無理をしても良い物を買いなさい。そのほうがきつと後悔しないから」が、口癖の祖母のことだから、安物ではないだろう。もしかするとその教訓を得た「後悔の品」なのかも知れない。

「お預かりの時計ですが電池交換して動きの確認はできました」

店員は時計を布で拭きながらそう言った。

とりあえず近くの時計屋を探したらショップモールの中にあることがわかり、持ち込んだ。私はその言葉に想像していた以上の喜びを感じた。でも、何やら問題がらしく店員は話を続けた。

機械的な不具合があり、それを改善するには分解掃除というものをする必要があつて、それはかなりの費用がかかるらしい。でも、それだけの価値のある時計でもあるらしい。特に「譲り受けたお時計でもありますし」という言葉は強く響いて…。

まずい―私は店員から視線を外した。

丁寧な時計について説明をする姿が単に時計のことを考えているそれだけだとしても、祖母に対して思いを寄せてくれている…そんな姿に見えてしまったのだ。私は溢れだそうとするものを抑え込もうとして、顔に力を込めた。

祖母は今、病院のベッドの上。3日前に入所していた介護施設から移った。誤嚥性肺炎。2年前に患った時も医者から「覚悟」を求められた。もちろん、今回も同様だ。そして、今回は両親も叔父や叔母も覚悟をしている。私はと言うと、何をどう覚悟していいのかわからない。それが、正直なところだ。

「何かあればお気軽にご相談ください」

店員はそう言って説明してくれた内容を記したものと時計を渡してくれた。本来なら笑みを浮かべて礼をいうところだろうが少しでも力を緩めたら、私の目からは涙が落ちる。でも、感謝しています。本当に、ありがとうございます―心で丁寧に頭を下げた。伝わってくれたらいいな、という淡い期待と共に。

気持ちを落ち着かせるために立ち寄ったトイレ。そこで鏡に映った自分にハツとした。能面みたいな顔。それはそう表現されるもの。慌てて鏡の前で笑顔を作ってみたが、思うように顔が動かない。モデルや女優ではないのだから、そうそう自由に笑い顔なんて作る

ことはできないのは仕方がないが、それにしても：動かない。

時計屋での我慢が要因ではない。それはわかっていた。この3日、作り笑いを作り続けた反動、それが要因だ。

祖母には私以外にも4人孫がある。でも、私が初孫であり、最も近くで生活していることもあって、一番可愛がってもらっていると自他ともに認めている。なので、まわりは求める。私の笑顔を。

祖母には見えているか、いないのかもわからない。誰もはっきりと言葉にはしてこない。でも、そのプレッシャーを感じ続けている。そして、祖母への感謝の証なのだと思うって私はそれに応える。

これが例の覚悟の具体例なのか。とにかく私は自分の本心とは裏腹に笑顔で病室に：祖母の前に居続けた。

「あなたは優しすぎる子ね。まわりにいつも気を使っている。もっと自分を大切になさい」  
いつかの祖母の言葉が蘇って、カバンにしまった時計を取り出した。しっかりと時を刻んでいる。店員は「遅れや止まりがあるかもしれません」と言ったが、私にはそんなことが起きないような気がする。

トイレを出て、最初の角を曲がり、視界に飛び込んできたカフェの店員の笑顔。私は足を止めた。年配の老夫婦にメニューの説明をしているその表情は、営業スマイルとは一線を画す。不安や戸惑いをそっと包み込む。その心からの笑顔は、私の中に生まれつつあった覚悟を確固たるものにした。

淡い期待でしかなかった。むしろ、駄目だろうと思っていた。その祖母の時計が再び時を刻み始めたのだ。淡くても、おぼろげでも、何であったっていい。期待したいことを期待したい。

「あなたはあなたの思う覚悟を持ってばいいんだよ」

祖母の声が聞こえた気がし、掌の中の時計を見た。

いつかは必ず止まってしまおう。それは仕方のないこと。

でも、今はまだ時を刻んでいる。

### 03 笑顔の行方

カフェモカを一口飲んで、こぼれたのは仕事を終えた充実の息。それではなく、明らかなため息。

「仕事は半人前でも、特典は使えるんだよな」

まだ耳に残る店長の大きな独り言が、追加のエスプレッソショットが生み出すビターな後味を汚していく。それを洗い流そうと、もう一口飲んだ。

制服の可愛さと、ドリンクメニュー無料の特典に魅かれて始めたバイト。土日に仕事というのはマイナスイス面だけど、100%希望通りの仕事なんてこの世の中に存在しない。最近気がついた。

今の仕事は嫌いじゃない。毎日変化がある。同じ日なんて1日もない。親子で、夫婦で、友達同士で、仕事仲間でも、もちろん独りでも、いろいろな人たちがいろいろな人たちと、いろいろな目的でお店にやってくる。ドリップ一杯で、何時間も仕事や読書をしているお客さんだって嫌いじゃない。土日の混んでいるとき以外なら。

でも、店長は別だ。

何かと言うと、ネチネチと言ってくる。始めのうちは、それを“指導”だと思っていたが、ちよつと違う。最近気がついた。私以外のスタッフには言わないことも言ってくる。例えば、メニュー表を見ても内容がよくわからないお客さん：初めての方とか、年配の方とか：そういうお客さんに丁寧に説明をする。それはマニュアルでも決められている。私はそのいうお客さんには受けが良いらしく、ついつい長話になってしまう：「今日は孫の誕生日を買いに来てね」とか：それに対して店長は「むやみに時間をかけるな。客は一人じゃないんだ。君が説明に入ると、列が長くなるんだよ。列が」と言う。そして、最後にこうやってそれは締めくくられる。

「お前なあ、『はい、はい』言つて笑つていれば済むと思ってるなよ。真剣みがないんだよ。もつと真面目にやれよ。やって下さいよ」

ネチネチ言われる直接の原因が何であれ、これを言われるのが一番嫌だ。

「あなたの笑顔はいいね」

お客さんの中にはその声を掛けてくれる人がいる。言わなくてもいいお世辞いいを言う必要はない。本当は喜んでいい。自信を持つていいこと。

でも、その言葉も店長のネチネチと大差ない。この仕事をやっている以上、笑顔が素敵と思われるのは良いことだろうけど、それはたまたまでしかない。条件反射で目元が、口元が、表情筋がそう動いてしまうだけだ。

なんでそうなったのか？いつからそうなのか？…そのことはわからないし、考えない。考え始めたら、自分が嫌いになりそう。だけれど、『はい、はい』言つて笑つていれば済むと思っているなよ」と、繰り返し聞かされると流石に、そうなのかな？そうやってなんでも済ませようとしてきたのかな？と思いは始める。最近自分が少し嫌いになってきた。

「あら」

バス停に向かう途中で背後から声を掛けられた。振り返るとそこには初老の夫婦：声を掛けたのは奥さんだった。

「先程はありがとうございました」

小さく頭を下げたその姿に、思い出した。私が接客したお客さんだ。

「誕生日、無事に買えました」

ショッピングモールのペーパーバックを掲げた。

「よかったですね」

目元が、口元が、表情筋がいつもの動きをした。

「お仕事、今日は終わり？」

「ええ。よろしかったらまた来てくださいね。お待ちしています」

振り返り、カフェモカを一口飲んで、こぼれたのはお客様に気に入ってもらえた充実の一息。それではなく、明らかなため息。

と、その時、衝撃に襲われた。何に当たったかもわからないくらいの不意打ちで、カフェモカが歩道にこぼれた。

「あ、あ…ごめんなさい」

その言葉は、カフェモカが服にはかかっていないようだ、確認してからようやく届いてきた。

「ええ」

と返した自分の表情に…その感覚に、心の中で舌打ちした。

「本当に、ごめんなさい」

その人の手にはスマホ。メールか、ゲームか…それを見ていて私には気がつかなかった、そういうことらしい。40歳位に思える男性。そんな「いい大人」が…。もし私ではなく、あの夫婦にぶつかっていたら怪我をさせていたかも知れない。そう思ったら、すんなりバス停に向かうことが出来ずに、その男を振り返った。

「あっ！」

視線がとらえたのは、再びスマホを片手に歩いている男の姿。それも、ゆっくり散歩という感じではない。その向こうには、こちらに向かう人の姿も見える。

「何考えてるんだか」

さっきまでのとは明らかに違う種類のため息がこぼれた。そして、目元が、口元が、表情筋がいつもとは違う動きを見せた。それを感じて私は心で笑顔を作った。

私、こんな表情も出来るんだ、と。

バス停を降りればすぐに見つかるだろう—そんな根拠のないことを思った自分に悪態をつきたい気分だった。全くそれらしい建物が見えない。

自分の知っているこの辺りは畑や田んぼで、道路も片側一車線だった。まともに歩道すらなかったはずだ。すっかり変わった街並みが恨めしい。

今では大型店舗をはじめ、ズラリと建物が並び中央分離帯と歩道がある道路へと変わっている。町を出て約20年。全く帰ってこなかったわけではないが、このあたりを歩くのは初めてかもしれない。改めて、経過した時間の長さを感じる。

まるで浦島太郎だな—そんなことを呟きながら、買う気もないのにぶらっとお店に立ち寄る。そんな時間は残念ながらない。私はケイタイを取り出した。

お義姉さんからのメールを呼び出し、そこに書かれた「救急医療センター」の文字をなぞり、地図検索にかける。その結果が表示された液晶を目にして、舌打ちをした。あろうことか西と東を勘違いしていた。来た道を戻らなくてはならない。

タクシーを使うべきだったな—自分を殴りたい気分だった。

「お義兄さんが車で事故にあつたらしく、緊急手術だそうよ」

第一報を受けた時の衝撃は新幹線の中で随分と納まった。しかし、完全ではない。現実味のない感覚と焦燥感は自分を包んだままだ。

「あなたにもすぐに来てほしいって」

第二報を受けた時の衝撃は新幹線の中で随分と納まった。しかし、それと反比例するように様々なシュミレーションが頭を駆け巡っている。

兄とは特別仲がいいという兄弟ではない。だからと言って悪いというものでもない。帰郷した時は顔を合わせるし、時々ではあるが電話やメールで近況を交わすこともある。最近は専ら年をとった両親の話だった。

「まあ、長男は俺だから」と、最後は話を引き取ってしまう兄。

小さい時から「長男」であるという自分ではどうにもできない運命に対しあらがうことがない。そして、自分はそれにすっかり甘えてきた。故にもしもの場合：いや、今はそんなことは考えないでおこう。

まずは、病院に—気持ちを切り替えたその時。右肩にドンとひとつ衝撃を受け、何かの液体が歩道にこぼれた。

何をやっているんだ。馬鹿—自分を罵倒したい気分だった。

しかし、女性：ぶつかってしまった相手は柔らかない笑顔を返してくれた。

本来ならこぼれてしまった飲み物を弁償したいところだが、時間がおしい。一礼して、先を急いだ。

結局、病院はバス停からそう離れていない所に建っていた。それすら目に入っていないかったのだ。自分で感じている以上に視野が：思考が狭くなっている証だろう。

受付で病室を確認していると、兄の娘が声をかけてきた。すっかり大人の雰囲気の子にちよつと驚いたが、そんなことを言葉にして挨拶を交わしている余裕は自分も彼女もない。

「おじさん。遠くからありがとうございます」

その感情を必死に抑えた声で、それなりの覚悟を求めている。

「青信号で交差点に進入した父の車に、信号無視の車が突っ込んできたそうです。相手はかなりのスピードが出ていたようで、父の車は弾かれて、対向車にもぶつかって」

「手術は一時間ほど前によく終わり、今はICUに入っています。会えないわけではないけど、父はまだ眠っています。それに、時間制限もあります」

姪はまるで看護師か警察官のように淡々と状況を説明してくれた。

包帯で包まれた人体であろうそれには、いくつもの管がつながれていた。そして、いくつもの計器がその周りを包んでいた。ベッドにかけられたプレートに見慣れた名が書かれている以外に、それを兄と信じる根拠はない。止めていたシュミレーションが再開された。「目覚めることはない」

ICUに入る前に医師から聞かされた。まだ、お義姉さん以外で知っているのは自分だけだということも併せて。姪には母であるお義姉さんが言うべきだろうが、両親には自分が言うのと、聞くと同時に決めた。ひどく落胆をするだろう。年齢もあるし、聞いた後のことも心配だ。もう「次男」というポジションに甘えることはできない。でも、そんなことよりも心配なのは、お義姉さんと姪の方だ。これからの二人の暮らしの方だ。

保険もあるだろうし、ある程度の金銭は問題ないだろう。しかし、いつまで続くかわからない看病が待っている。精神的にも経済的にもタフなことになるのは間違いない。

姪は大学院に行きたい、と以前あった時には言っていた。兄もそれを支持していた。しかし、叶えてあげることが難しいかも知れない。気持ちとしては何とかしてあげたいが、自分にも家族がいる。支援はできない。両親は：可愛い孫のためだひと肌もふた肌も脱ぐだろう。それなら叶えられるか？あの姪が父の世話を母にだけ任せて、自分は勉学に勤しむ。そんな選択をするとは思えない。自ら大学院は諦めるだろう。

問題はそこだ。自ら：そう思うことで姪自身もまわりも慰めになるかも知れないが、結局それは「選択肢のない選択」でしかない。彼女のこれからの長いであろう人生を考えれば、そう簡単に結論を出してはいけない。いけないが：これは気持ちの問題ではない。結局はもう出ている。あとはそれをどう納得：したように環境を整えるか：。

「なあ、どうする？」

包帯に隠された兄の顔を思い浮かべ話しかけた。もちろん、返事はない。機械の呼吸音と機械の心音が聞こえるだけだ。

「大丈夫。心配すなつて言えない弟で悪いな」  
本当に情けない話だ。

「だからさ、起きてくれよ」  
本当に情けない話だ。結局、40年間甘えっぱなしだ。でも、それが本心だ。

ICUを出ると、止めていた煙草が無性に吸いたくなった。売店でライターと共に手に入れた。今では建物の中で煙草を吸うというのは贅沢な事となってしまい、おかげで恨めしいほど奇麗な夕焼けに出くわすことになった。

「一本もらえない？」  
小さな声が背中に届いた。

お義姉さんだった。煙草を吸っていた記憶はないが、何も言わず差し出した。それをゆつくりとつまんで、口に運ぶ。くわえる直前、「どうしよう」そうぼつりと言ったのが聞こえたが、反応はしなかった。

2本の煙が、光の向こうに消えていく。何も話さない。何も交わさない。しかし、お義姉さんもその煙の向こうに、命の尊厳とはかけ離れた現実的な：そんなシュミレーションをしているに違いなかった。

## 05 二人の約束

吸えないなら吸えないでかまわない。それくらいだった。だから妊娠して簡単にやめられた。産後も吸いたいとは思わないでここまで来た。でも、包帯で巻かれた旦那の姿を見て：いいや、決断の時を迎えることを知り、彼女は21年振りに煙草に手を伸ばした。

流石に肺に吸い込むまではできない。それでも、少し気持ちが悪く落ち着く。錯覚かも知れない。いつもはしないことをして、今という時間から現実感を削いでいる。それだけのこともかも知れない。それでも、彼女には十分だった。だから、1本を5分以上かけてゆっくりと吸い切った。

一人娘が20歳になった時。親としての最低限の責任を果たしたと、旦那と互いをねぎらった。まだ大学生だから、自立をしたとは言えないが、それでも一息つけるね、とねぎらった。

少し酔った勢いも手伝って、老後の話もした。現実的な話ではない。経済的なことは考えないで、クルーザーでの世界旅行だの、世界遺産めぐりだの、英会話を習うだの、小さな畑を借りて農業をしようだの、そんな絵空事だ。

それでもそのうちの一つくらいは実現できるのではないか、実現したいな、と彼女は思っていた。そして、旦那も同じ思いでいた。その証拠に、どこまで話を積み重ねても、何一つ虚しさがなかった。叶いつこない、と思いつながら話をしていたら、どこかで虚しくなつて話を止めたはずだ。

その話の最後の方だった。

「これは現実的な話な」と、あえて前置きして旦那が自らの希望を口にした。

娘を持ったからには、花嫁の父として右往左往してみたいし、孫も抱いてみたい。それに仕事以外のことで夢中になれるものを見つけて、お前と二人でのんびり暮らしたい。生まれてきたからには、長生きはしたい。最近はそう思う。長生きしたい。でも、それはこうやって自分の言葉で話せて、食べられて、歩いて、動けてつてことだ。それが生きるつてことだ。だから、もしもの時は、延命治療はいらない。

少し酔っていたが、その眼は真剣そのものだった。

「わかったわよ。それはちゃんと守る。だから、もし私がそうなったときもお願いね」

二人は改めてグラスを合わせた。

第三者の証人がいるわけでも、書面に起こしているわけでもない。夫婦が自宅で杯を交わしながら話したことだ。そんな口約束だ。でも、いいや、だからこそ彼女にはとても大切な約束だった。何よりも守らなければならない約束だった。

「どうしよう」

再び廊下の長椅子に座ると、また同じ言葉がこぼれた。もう何度目になるだろう。気がつくど、その言葉を吐き出している。

昨日まで、いや今日連絡を受けるまで自動車事故で：そんなこと思いもしなかった。しなければならぬこと、それは頭で理解していても、何も行動に移せない。整理ができない。

「お母さん、大丈夫？」

いつの間にか娘が隣にいた。

「叔父さんだけど、うちに泊まってもらってかまわないよね？」

叔父：旦那の弟と一緒に煙草を吸っていたのに、彼女は一切の確認をしていなかった。

「そ、そうね。でも、お仕事は大丈夫なのかしら？」

「『自分がいなくても関係ないよ』って言っていた。そんなことはないだろうけど」

「それで隆弘さんは？」

「仕事の電話みたい。待合室の方で話ししてる。ね、全然『大丈夫』じゃない」

「そう。後でお母さんから伝えておくから」

その言葉に、娘は頷いた。そして、彼女をじっと見つめた。そのまっすぐな眼が何を言いたがっているか、何を察しようとしているか、彼女には理解できていた。

娘には約束の話をしていない。それどころか、お父さんがもう目覚めることがない、そのことすら伝えていない。その自分には伝えられていないこと、その存在に娘は気付いたのだ。

「お母さん？」

娘のその声には、それまでとは違う力が入っていた。

話さなければ――彼女はまずは、娘の手を握り締めた。

どの順番で、どう話したのかは覚えていない。涙を流して、声を詰まらせることはギリギリで回避したけれど、それでもきちんと話せたのか自信がない。

「お母さん」

今度は娘が彼女の手を包みこんだ。こうやって改めて触れられると、本当に大人になったんだと実感する。そして、強くなったことも。

「一人で抱えないで。私も受け止めるから。それにおじいちゃんやおばあちゃんにも話さないよね。もちろん、叔父さんにも」

彼女にもう涙をこらえる理由はなかった。

例えお義父さん、お義母さんに反対をされても、酷い嫁だと罵られても、旦那の意思を、約束を果たそうと覚悟を決めた。だから、涙は流し切っておきたかった。

病院の廊下。その長椅子に座ったまま、彼女は声を上げ、涙を流した。

## 06 「本気」始める

戻るなり事務所の壁掛時計を見た。その前に時間を確認したのは営業車を降りる時だから、数分も経っていない。よし、大丈夫―それでも、改めて確認と決意をした。その時だった。携帯が“待った”をかけてきた。液晶には取引先の担当の名。反射的に手にはしたもの、出るには躊躇した。しかし、バイブでなく音が出ている以上、周りの視線も気になる。

「はい、神埼です」

嫌な感じを抱きながら電話に出た。こういう時はいつも以上に声が明るく愛想良くなる。一種の職業病だろう。

「どうも、遅くに申し訳ない」

僕のそれとは真逆の声が返ってきた。しかも、20時過ぎでも平気でかけてくる相手が17時過ぎで「遅くに」と付けてきた。

今日は定時にスッパつと上がりたい。約束があるのだ。そう、デート。それも予想外に彼女の方から誘ってきたデートだ。過去2回は僕が何度か誘ってようやくといった感じで実現したが、今日はそうではない。遅れたくはない。遅れるわけにはいかない。定時まで1時間を切り、あとはルーティーンの事務作業をやって、というところ。

そこにかかってきた厄介な電話。内容云々ではない。電話そのものが厄介…内容も厄介ではあったが…。

「それでは、まず確認をさせてください」

向こうが求める言葉を聞かせない限り終わる気配がなかったが、代わりにそう言って強引に電話を切った。と、同時にメモのために持っていたボールペンをデスクに放り投げた。その音に隣の筒元が反応した。

「どうかしたんですか？」

椅子を寄せてきた。

昨日なら、明日なら、後輩に愚痴っぽいことはこぼさないが、今日という日が、このタイミングがそうさせた。

「ああ、急ぎ例の商品を欲しいんだとさ」

発注自体は受けていた。しかし納期指定より2日も前に欲しいと言ってきたのだ。ただでさえ人気アイテムで数をまとめたの指定日納品が厳しいところを、店舗リニューアルセールのメイン商品にしたいという事と、古くからの付き合いという事で、他の営業に文句を言われながらも課長決裁を取り、どうにか確保はした。しかし、予定の納期に余裕はない。2日も前倒しは不可能だ。と、そう言って簡単に収まる話でもない。答えは出ている、しかし、納得のさせ方が問題なのだ。

「課長のいない時に、厄介ですな」

筒元のその声で、課長の席を見た。確かに、空いている。続けて、ホワイトボードを見

た。課長の名の横に「早退」とだけあった。

「なんでいないの？」

「よくわからないけど…家のことで何かあったみたいですよ」

「『家』？私用かよ、こんな時にい」

担当を引き継いでまだ1年と少し。それまでは課長が長く担当していた取引先だ。肩書き云々ではなく、まだまだ課長の方が信頼厚い。頼みの綱が切れた…そう感じて、また壁掛時計を見た。

秒針の進みが全く違って見える。その速度が速いか、遅いか、わからない。そんなことには意味がない。デスクに転がったペンを、仕方なく拾い上げた。

「でも、課長がいないんじゃない、どうもできないですよね」

失望の淵にいた僕に筒元の言葉が綱を垂らした。

そうか―その綱を握りしめた僕は、課長の携帯を鳴らした。

自分が無理にしゃしゃり出ることはない。「管理職は特定の担当を持たない」という方針を守るため、便宜上自分があてがわれているだけなんだ。面倒事は実質の担当に任せればいい。それこそが、二言目には課長の名を出す先方も望むことだろう。言ってみれば、これも一種の顧客満足度アップの為の方策なのだ。

いつもよりアドレナリンが分泌されているのだろう。思考の速度も、質も全く違う。冴えている。

課長は3コールで出た。

「どうかしたか？」

課長の声はいつになく穏やかだった。そして、僕の話に無駄な言葉をはさむことなく、話を聞いた。

「そうか、向こうの手配ミスならこつちが無理を聞いてやることもないが…お前はどうかしたい？」

「え？」

「担当はお前だろ」

「時間的な問題もあるので、当初の予定通りに行きたいのが本音です。でも…」  
あえて、そこで切った。

「でも、なんだ？」

「ただ、それでは向こうは納得しませんよね。必ず『古い付き合い』って事を言ってくる。

それ言われると、僕だとちよつと…」

「話を収められない、か？」

「ええ」

それは半分本当で、半分嘘。

確かに先方の窓口は課長の代から変わっていない。そういう意味では「昔の話」を出されても、僕としては厄介でしかない。でも、これは個人と個人の関係ではなく、会社と会社の関係なのだという事は理解している。知らないことをそのまま「知りませんよ」と

口にしても、何も解決に向かわないこと位は分かっている。昨日なら、明日なら、ちゃんと大人として立ち振舞う。しかし、今日という日は…。

「わかった。俺の方から連絡して話してみるから」

5分ほど話して：いや、粘って求めた言葉を引き出した。

「明日も出られそうにないから、メールを入れておく」

課長のその言葉に引っかかりはあったが、目は壁掛時計を捉えていた。

「待たせちゃった？誘ったのこつちなのに、ごめんね」

これまでの2回とは違う笑顔がそこにはあった。

彼女は約束の時間から3分過ぎでやってきた。男に誘われることに慣れている。待たせることに慣れている：そんな感じを少し抱いていたので、誘われたこともそうだが、この3分に謝ったことも意外だった。

「仕事、大丈夫？忙しいんじゃないの？」

「大丈夫。気にかんじやないよ」

そう、全然平気だ。例え、明日の朝、とんでもない内容のメールが課長から届いていたとしても、平気だ。

「食事の前に行きたいところあるんだけど、いい？」

「どこ？」

「本屋さん」

「本屋？」

思いがそのまま声と表情に出た。

仕事関係の雑誌を買いたいらしい。

「私だって、仕事はちゃんとやってるんだよ」

と、また笑顔を見せた。今度は少し照れが混ざっている。

「でも、私の仕事に付き合わせちゃうみたいで悪ね。またに…」

「大丈夫。気にすることじゃないよ。僕も見たい本あるし、なかなか行けなかったからちようどいい」

「本当に？」

「本当に」

それは半分本当で、半分嘘。

本屋に付き合うことは何の問題もない。ただ、見たい本などはない。でも、彼女が雑誌を見たり、選んでいる間、時間をもてあましたとしても、全然平気だ。だって、僕は彼女に本気で恋を始めてしまったのだから。

## 07 小悪魔のわんやき

頼んであったデザートを運んでもらえるよう彼は店員に伝える。

「さっきの雑誌見せてもらえる？」

そう口にしたのは、まだ店員がお皿を片づけている途中。なんとも間の悪い奴だと心でため息、顔には笑顔を浮かべて頷く。

30代の女性をコアターゲットにした雑貨やアパレルのネットショップの運営スタッフをしている私にとって、ファッションやライフスタイル提案の雑誌は一通り目にしておきたい。メインどころは会社で購入しているが、自分で買うのも少なくない。それを食事の前に彼と買いに行った。

「なかなかこういう雑誌を見る機会がないからね」

彼は楽しそうにページを、捲って行く。その無垢な…無防備な笑顔に私の中の小悪魔が囁く。

「イケルヨ」

最初はそれを無視。しかしそれは無駄な抵抗。

「ちよつと貸して」

私は手を伸ばさず。雑誌を受け取ると「目的は仕事以外にもあるの」と言いながら、巻末を開く。

「何？」

彼は当然の質問をする。

「星占い」

私は何気なく答える。

「女の子って占い好きだよね、なんで？」

彼は当然の平凡な質問をする。

私は笑顔だけを返す。

「星座は何？」

彼は当然の質問をする。

私は笑顔だけを返す。

「何？」

彼は当然に再質問をする。

私は自分の星座を指さしながら、彼に雑誌を戻す。

「あれ？もしかして誕生日、もうすぐ？」

彼は大きな発見をしたかのように、笑顔を放つ。

私は心で爆笑、顔には笑顔を浮かべる…ひとさじの恥ずかしさを混ぜて。

デザートが運ばれてくると、彼は誕生日に欲しいものを聞く。もちろん、そんなことをストレートに聞かれて、ストレートに答えるなんて馬鹿げたことはしない。

「このチョコレート、すっごく美味しい」とか、話をそらす。だけど「この前食べたガトーショコラがすっごく美味しくて」などと、話をそらしすぎることは口にしない。結果、彼は何度目かの「欲しいものは？」を口にする。

「ちよつと貸して」

私は手を伸ばす。雑誌を受け取ると「気になるのが載っているの」と言いながら、巻頭を開く。

最初に誘われた時から：いや、飲み会でひと目見た時から決めていたのだろう。私の中の小悪魔は、なんともたくましい。そして、今回も見事にミッションを完結しそうだ。

「チョット簡単スギテ、面白ミニ欠ケル」

総額10万近い誕生日プレゼントの“予約”を取りつけながら、小悪魔はため息をこぼす。昔は1万もしないリングや時計でも心底喜んでいたので：なんとふてぶてしくなったのだろう。そのうち小悪魔の「小」が取れてしまうのではないか。

流石に食事だけというのは可哀そうだと思い、お酒も一杯だけ付き合った。ホテルはもちろん、キスもない。「明日、早出になっちゃって」というシナリオを使う必要さえなく、笑顔で別れた。

「チョット簡単スギテ、面白ミニ欠ケル」

確かにそれは言える。オスの欲望を潜り抜け、受け流し、もったいつけて、自らの欲望のみを満たす。それをどう仕掛け完結させるか、そんなスリルはない。簡単に事が進む。

駅に一人で向かう途中、ひと際明るい照明に吸い寄せられた。ジュエリーショップが平日の夜22時に開いていることにも驚いたが、店内にはひと組の男女がいたのも驚きだった。

カウンターに並んで座って、店員から差し出されたトレーを覗き込んでいる。きつと、指輪でも見ているのだろう。二人のその手はカウンターの下でしっかりと握られていた。そして、そのつないだ手を小さく二度、三度と小さく振って見つめ合った。

「これ、いいんじゃない？」

「でも一番高いよ？」

「一生に一度のものだよ。大丈夫」

「でも…」

「値札見ないなら、これなんでしょ？」

「そうだけど…」

「じゃあ、決まりね」

「いいの？」

「いいの」

「ありがとう」

頭の中で、三流のドラマが流れた。その続きは見たくも、聞きたくも、想像したくもなく、明るい店内から薄暗い歩道に視線を移した。その時だ。

小悪魔が囁いた。

「ホントハ、憧レテイルンダロ」

ホントに小悪魔な奴だ。

## 08 抑揚のない声

男はそこが不釣り合いな場所だと感じて居たたまれない。女はそれを感じ取ってその手をしっかりと握りしめた。

店員は閉店間際に訪れた客に嫌な顔一つ見せず、淡々と作業を進めた。

「お待たせしました」

その声と共に差し出されたトレイ。その中には小さな紙が乗っていた。二人はそれを覗き込む。

そこには手書きで数字が書かれていた。二人は一の位から順にその数字の桁数を数えた。想像していたよりも数字は大きく、二人は顔を見合わせた。

「こちらでよろしければ、即金でお支払いします」

二人の驚きとは対照的に、抑揚のない店員の声だった。

二人が持ち込んだダイヤモンドの指輪は、元々は男の曾祖母の物であった。それが今は女…妻の物となっている。本来なら、それを二人の子供もしくはその妻にと受け継がせていくものだが、二人には子供はいない。だから売り払う…というわけでは、もちろんない。

ここに至るまで、散々二人は口論を繰り返した。まとまったお金を短時間に用意するには何かを売り払うしかなかった。その中で生活や今後の仕事に影響が出ない物となると…結論は最初から決まっていた。選択肢のない選択。というやつだ。でも、いや、だからこそ納得の仕方が大切だともわかっていた。わかっていたが、結局は定められた期限が背中を押した。

情けないひ孫で、申し訳ないですー男はすっかり心の中での口癖になった言葉を顔を覚えていない曾祖母に向かって発した。

男は小さく頷き、店員が頭を下げた。その時、

「これも一緒に」

女がトレイに差し出したそれは、男が送った婚約指輪だった。男は全く知らなかった。それがストレートに表情に出て、店員も躊躇した。

「私のだけ売らないっていうのも気持ちが悪いのよ。それに、ちゃんと稼いでもう一度買ってもらうから。もう少し大きいやつを」

女はさらっと言った。男は黙るしかなかった。

「お願いします」

「それでは書類をお持ちします」

女の無理した明るい声とは対照的に、抑揚のない店員の声だった。

翌朝、女は9時になるのを待って銀行へと向かった。工面したお金の1/3を自分の口座へ、1/3を大家の口座へ振り込んだ。残りの1/3はその他の支払と当面の生活に回る。

二人は小さな居酒屋を営んでいた。地場の幸と全国の銘酒が楽しめる店としてそれなりに繁盛した時期もあった。しかし、3年前に格安居酒屋のチェーン店が徒歩2分ほどの距離にでき、状況が変化していった。最初のうちは「客層が違う」と影響は限定的と思っていたし、常連客も異口同音だった。しかし、景気が一向に向上かないデフレ社会の中にあつて、格安はお客にとって何よりの魅力。格安競争をするには二人の店は小さすぎた。客足は次第に遠のき、店の家賃が半年分滞っていた。これまでどうにか待たせてももらっていたが、という最後通告が来ていたのだ。

女は振り込んだその足で、大家の家へと向かった。半年も滞納したのだ。銀行から届く振込通知だけで「よし」とは当然思えない。途中に、和菓子屋で手土産を買った。

インターフォンを押そうとすると、庭先で趣味の家庭菜園をしている奥さんの姿が目に入って、女は声を掛けた。奥さんはその手を止め、エプロンで土を払いながら近づいてきた。その時になって女は自分が緊張していることを自覚した。

「ご迷惑をおかけしました！」

そう頭を下げたのは、反射的なことだった。

「間に合ったの？」

奥さんは、昨夜の店員のような声で言ってきた。

「はい。先ほど振り込んできました。あの、あと、これを：つまらない物ですが」と、紙袋から箱菓子を取り出し、差し出した。

「そんな気を遣わなくてもいいのに。それよりもお店大丈夫？来月からは大丈夫なの？」奥さんはお菓子を受け取らなかった。

女は即答出来なかった。大丈夫という確信はない。指輪を売ったお金で、溜まった支払は済ませることは出来る。でも、これまでと同じように仕入れに応じてくれるとは限らない。何より、客足が戻るといふ保証はどこにもない。自分がパートに出るといふ選択もあるが、そうそう見つかると思えないし、第一店の仕込みが回らなくなる。

「大丈夫なの？」

再び聞かれた。

「大丈夫です」

女には結局、そうとしか答えられなかった。

「そう。ならお願いね」

ようやく奥さんはお菓子を手にした。

「はい。ご迷惑をおかけしました」

女は再び、深く頭を下げた。

「万一、遅れるときは、先に行つて下さいね」

抑揚のない声が頭に降ってきた。それが重石のようになって、女は顔を上げられない。悪いのは自分たちだ。それは分かっている。チェーン店を、不景気を、デフレを悪く言つたところで何かが改善するわけではない。ましてや、大家に何かを言つたところで全く

の的外れだ。

分かっている。

分かっている。

そんなこと、分かっている。

それでも、女はせめて心の中ではぶちまけたかった。

「本当に心配してくれるなら、たまには店に飲みに来てくれないじゃない。お金って  
そうやってみんな回して行くものでしょ」

女がようやく顔を上げた時、奥さんの姿はそこにはなかった。

「これ、どうしたの？」

息子が居間のテーブルにあった和菓子を見降ろしながら聞いてきた。

「もしかして…」

私が答える前に、察しがついたらしい。包みを一つ手にしながら、こちらを向いた。

「で、支払ったわけ？」

「その挨拶に来た時に、頂いたのよ」

「…頂いたね」

そう言つて息子は、包みを広げその中身を一口で収めた。私は夕食の支度の手を止めて、お茶を入れることにした。

「期限付けて、ちよつと脅しをかければ払ってくるんだって。甘い顔しているから、後回しにされてたんだよ」

菓子をお茶で流し込んでから、息子が突き放すように放った。

5年ほど前になる。息子に勧められ、アパートや貸店舗の管理を業者に委託するようになった。確かに管理業務に費やす時間は減り、庭じりの時間も出来た。でも、「契約ですから」の一言で全てを機械的に進めていくその姿勢に違和感を抱いてきたもの事実だった。息子の言うように「昔とは違う」のかも知れない。でも店子の顔もまともに覚えていないようなそんな大家は居心地が悪かった。だから、今回は業者に無理を言つて店子の居酒屋の家賃を待ってもらっていたのだ。それも半年が限界だった。業者が息子に話をし、息子が期限を設定して書類を店子に送りつけたのだった。

「あんた、たまにはお店に行つてあげてね」

テレビを見始めた息子の背中に言った。

「ふん」

という気のない返事に、私はすぐそばまで歩み寄りもう一度言った。

「わかっているよ。でも、あそこはなんていうか、趣味に合わないんだよ。そこまで言うなら、お袋たちが行けばいいだろ？」

そう、私たちが時々はお店に顔を出してお酒を飲んだり、食事をしたりすればいい。どれくらい顔を出してはいないだろう。オープンしたばかりのころは、お父さんと月に何度かは顔を出していた。そして、いつも決まって会計が実際の値段よりも随分安くなっていた。それは大家である私たちへの気遣いだ。それがわかっているから、顔を出し辛くなつてしまった。

だから、息子に勧めている。勤めに出ている息子の顔はきつと知らないからだ。純粹なお客として、お店にお金を落とせるはずなのだ。

「みんなで支えあつて生きてるのよ。あなたが大きくなれたのだから、これまで…」

そこまで言うと、息子は立ち上がった。背中が「うるさいなあ」と言っている。私は続きを飲み込んだ。

一人息子だから甘やかして育ててしまった。そんな自覚はないが、実際そうなのかも知れない。ずっと実家住まいだった息子を、ようやく一人暮らしさせたのは1年ほど前。とはいっても、私たちの所有しているアパートに住んでいるし、夕食も毎日のように食べにくる。自分の望みは口にするが、こちらの望みには耳を貸さない。

一人息子だから甘やかして育ててしまった。そんな自覚はないが、実際そうなのだろう。今さら言っても仕方のないこと。そうなのだろうけれど。

「また不祥事です」

テレビからの声が二人に間に割って入ってきた。

「昨日の夕方、大手ショッピングセンターで…」

と、若い女性が淡々と原稿を読み上げ、やがて画面はそのショッピングセンターに切り替わった。

「学校で毎日見るだけじゃ飽き足らずに、盗撮かよ」

息子が突き放すように言った。そして続けた。

「こんな奴がなんで教師になれるんだよ。絶対にまともな動機で教師になんてなっていないだつて。馬鹿だよなあ、採用する方も」

高校の先生が女子高生のスカート中を盗撮した。その容疑で逮捕されたというニュースだった。

人を教える立場の人間が、弱いものを傷つける罪を犯す。最近はそのようなニュースを多く聞く。もう驚くことがなくなってしまう。それが怖い。警察官の飲酒運転もそうだし、公務員の詐欺もそうだ。「らしく生きる」その姿があまりにも崩れている気がして仕方ない。

それは私自身にも言えるのだ。大家として「らしく生きている」とはとても思えない。自らの手間を省くために業者に委託し、大した苦勞をすることなくお金を手にしている。それに違和感を抱きつつも、今さら昔のように、自らが足を運んであれこれ店子と話を重ねるもの出来ない。今回のことは、そんな割り切れない思いを紛らわすためのものではない。のかも知れない。正直、庭の草木の方が、店子のことよりも気になってしまう。それが私の現実だ。

「次のニュースです」

と、若い女性が笑顔を作った。その作られた明るさに背を向け、私は夕食の支度を再開しようとして台所に向かった。今日のメニューは息子の大好きなトンカツだ。

## 10 方針転換

休憩室で煙草を吸い終えた時、声をかけられた。それを発した人物は：確か：田島：木島：島田：島村：見覚えはあるが、名前はわからない。

「坂口君だね」

「はい」

「君の実家、地主さんだそうだね」

その名前もはつきり知らない男の声に、彼は身を硬くした。

なぜ、バレたんだ―それだけが、頭をぐるぐる、ぐるぐると駆け巡ったが、そんなことは考えても答えは見つからない。それに、目の前の男にとつては全く関係のないことだった。

「実は少し、頼みごとがあつてね」

馴れ馴れしい笑顔を見せ、男は作業服の胸ポケットから煙草を取り出し、それを彼に向けてきた。

「娘が近く結婚をすることになったんだが、その新居を探していたところ候補の1つ上がつたのが君のお父さんのアパートだね。急に決まった結婚で、何かと物入りでねえ」

ハッキリと口にしなことが彼をイライラさせた。要は便宜を図って入居費用を安くしろ、ということだ。もしかしたら、家賃も安くしろと言っているのかもしれない。

彼の父はその父の代まで所有していた土地を「有効活用」しようと、アパートや小さな貸しビルを建てた。景気がいい時には今よりも多くの物件を持っていた記憶があるが、今ではアパートが3件に貸しビルが1件。

その物件の一つに彼も住んでいるが、その職業は好きではない。「将来はお前のものだろ？いいなあ、安泰で」と言う者も少なくないが、その「結局最後は代々の資産で食ってくんだろ」という自分を見る冷めた視線が幼い時から大嫌いだった。

「夢はパン屋さん」

彼はそんなことを口にしたことがあった。その時、それを聞いた大人が言ってきた。

「お父さんのビルでやれば、テナント料がかからなくていいな」

その瞬間に湧き上がった大人たちの笑い声が酷く怖く、彼は2度とその夢を口にしなくなった。そして、いつしか夢自体を忘れて行った。

「アパートは父の物なので、僕には…」

「だから、お父さんに話してみてよ」

「今は管理会社に委託しているので、そういう話は…」

「でもさあ、お父さんのアパートには変わりはないんだしさあ、話してみてよ」

その男はやんわり断っている言葉など聞こえない様で、彼の肩をポンと気安く叩いて去っていった。

この手の話は初めてではない。昔は、そのまま父に話を持って行ったが、いつの頃から

かはそれすら煩わしくなり、「父の仕事とは無関係」で押し通すことが多い。それでも引き下がらない相手もいるので「管理会社」を持ち出す。

父に管理会社との契約を勧めたのは彼だ。両親の年齢のこともあるが、こういう頼みごとを遮断する目的もある。人生においてカネとコネが重要だ、と言う人も多いが同じ物を借りるのに人によってその代償が異なるのは不平等ではないか：そんな気持ちがあるにはある。

「でもさあ、話してみてもよ」

名前もはつきりしない男の気安さが蘇り、肩にけだるさを感じた。

その時、携帯が鳴った。

今夜、夕食はどうする？―母からのメール。

今日は外食でもしようかと思っていた。

いけない―と、打ったところで手を止めた。

気は乗らないが「父に話す」というポーズだけはしておこう。彼は方針を変えることにした。

実家には父の姿はなかった。町内会の会合だという。それがわかっていたら飯を食べてからでも良かったとも思うが、一人で食事をする母の姿を想像するとこれでよかつたとも思う。どうやら今夜はトンカツらしい。彼が来るからこのメニューになったのは間違いない。母には重たい食事だし、トンカツは彼の好物の一つだ。

「あんだ、たまにはお店に行つてあげてね」

ニュース番組を見ていると、母が声を掛けてきた。

「店」とは父のビルの一階に入っている居酒屋のことで、近くにチェーン店が出来たことで商売が厳しいらしい。ここ半年の家賃が滞っていた。両親は特に何も言わずに数カ月待っていたが、それでは期日通りに払っている他の人たちに示しがつかない、と彼が父と管理会社に話をして督促状を送った。ポーズだけはしておこう、と。

その店に客として言ってお金を使いなさい、つてことだ。そうやってお金を循環させて、みんなで支えあっていこう、つてことだ。それは理解できる。母のそういう考えは嫌いだやない。

でもタイミング最悪。「地主の子」「大家の息子」そんな立場の話は、彼にはうんざりだった。まともに答える気にならず、母との間に気まずい空気が出来てしまった。

「また不祥事です」

テレビからの声が二人の間に割って入ってきた。

「昨日の夕方、大手ショッピングセンターで…」

と、若い女性が淡々と原稿を読み上げ、やがて画面はそのショッピングセンターに切り替わった。

「学校で毎日見るだけじゃ飽き足らずに、盗撮かよ」  
反射的に言葉が飛び出た。そして止まらなかつた。

「こんな奴がなんで教師になれるんだよ。絶対にまともな動機で教師になんてなってないんだって。馬鹿だよなあ、採用する方も」

高校の先生が女子高生のスカートの中を盗撮した。その容疑で逮捕されたというニュースだった。

人を教え育てる立場の人間が、弱いものを傷つける罪を犯す。最近はそのようなニュースを多く聞く。もう驚くことがなくなってしまうている。それなのに、今日は感情的な、反感的な言葉が、自分のコントロールの外側で飛び出した。

「次のニュースです」

と、若い女性が笑顔を作った。その作られた明るさに、父が帰ってきてきても今日のところは例の男の話をしないう方がいいな、と彼は方針を変えることにした。父と口論するのは本意ではない。

## 11 軽はずみ

本番まで5分を切ったところで、ディレクターが下読みをしている私の元へやってきた。県警記者クラブから新しいネタで、ニュースが追加された。

「何を外すの？」

「そうだなあ…何にする？」

昼食のメニューを相談する…そんな軽いノリで聞いてきた。彼特有の現場を上手く回す気遣いだ。もちろん、私に決定権などは、ない。

生放送と言うだけでも、毎回予定通りには事は進まない。そこに予定外のニュースが入ってきたのだ。伝え方、聞き方…その言葉尻一つで、反感が生まれもするし、混乱も生まれる。スキルもあればプライドもある。ここにいるのは皆プロフェッショナルだが、皆ただの人間ではない。

「アタマ？」

私は手元の「新ご当地グルメ発見」という個人的にはカット候補No.1の原稿に目を落としたまま、差し込む順番を聞いた。

「Vが間に合えばね」

彼は原稿をセットのテーブルに置いて行った。

「間に合わなかったら？」

今度は視線を上げて、その背中に叫んだ。

彼は振り返ることなく右手を挙げた。親指を立てていた。それは「よし」でも「グッドラック」でもない。「ラスト」というサイン。これは局内全てで通じるサインではなく、彼特有のものでそれを理解できる者は多くはない。

「本番1分前！」

大きな声が響き、スタジオ内の空気がキュッと引き締まって、ようやく私は予定ニュース原稿の下読みを終え、追加の原稿に目を落とした。

高校教諭が盗撮容疑で逮捕—ああ、またこの手のニュースね。

この仕事をしていると物事に動じなくなる。というよりも、鈍くなるといった方がより正確かもしれない。

それにテレビで顔を出す仕事というのも何かとつとつとしい。買い物しているだけなのに、声を掛けられたりするし、それに対して少して素直な反応を見せれば、舌打ちされたり「うわあ、こわ」と言われたり。地方局なのでB級雑誌に追われることはないが、顔だしリスクに対する対価も少ない。

そろそろ潮時かな—頭の中ではあれこれ考えながらも、目はしっかりと原稿を読み進めていた。それもそれで、どうかと思…。

この仕事をしていると物事に動じなくなる。というよりも、鈍くなるといった方がより正確かもしれない。それでも、やはり何事にも例外はあり、それが今日の前にあった。

曾根浩介 45歳。

盗撮容疑で逮捕された高校教諭の氏名と年齢。

高校時代のテニス部の顧問だった。

結果、Vは間に合いそのニュースをトップで伝えた。それは幸いだった。もしこれが最後であれば、本場中ずつと気になって仕方がなかったに違いない。だからといって「読み終えた。はい、お終い」とはならないのは当然で、B級グルメの原稿を読む時の笑顔がいつも以上にわざとらしくなっている自覚症状があった。

プライベートで面識のある人間のニュースを読むのは初めての経験。それも罪を犯しての逮捕。罪は盗撮。テニス部の顧問。盗撮。テニス部。盗撮。顧問。盗撮。味わったことのない寒気が全身を覆った。

私が高校生の時は生徒に人気があった。顔は「どちらかと言えば、カッコイイ方」程度だったが、ユーモアがあったし、テニスが上手かったし。女子には人気があった。バレンタインにはたくさんチョコを貰っていた。私もあげた。本気で恋をした女子もいた。

盗撮。その言葉の持つ陰湿な雰囲気とは全く好対照の先生。

そう、こんなことがあった。

高3の文化祭の時。クラスで教室一杯を使った迷路を作成した。男子がその一角にビデオカメラを仕込んで、そこを通る女子のスカートの中を撮影しようとしていた。それを発見し、男子を咎めたのが曾根先生だった。そんな先生だった。

もしかして、自分もやるからカメラの位置がわかった？―想像したくないことの方が、つい想像してしまう。

当時から、やっていた？―盗撮。テニス部。盗撮。顧問。盗撮。味わったことのない一層の寒気が全身を覆った。

ケイタイがメールを受信して音を立てた。それで自分がアナウンス室に戻ってきたことを自覚した。ニュースを見た同級生からのメールかと思いい手を伸ばしたが、全く違うもので、その落差に吐き気を覚えるようだった。

「今夜、久しぶりに飲みに行かない？連絡待っているよ」

先輩の由香里さんからだ。彼女は今はフリーでイベントの司会やラジオやテレビを少しやっている。退社してからもこうして思い出したように連絡をくれるが、そのほとんどを私は断っている。理由は仕事が忙しいからということにしているが、一番はそれではない。先輩のお酒にはいつも決まって男もつくからだった。

どうせドタキャンが出たから、数合わせでしょ―返信すらする気分になれない。

私は局の電話に持ち替えて、記者クラブの担当を呼び出した。彼は2個下で、わがままを言える数少ない記者の一人。

「今日の高校教諭の件だけだ」

「ああ、盗撮の。またって感じですよ。それが何か？」

「原稿には『容疑を認めている』ってあったけど、常習者だったの？」

「家宅捜索で写真を焼いたCDとかは出てきたみたいだけど、そんなに数ないみたいですよ」

「最近やり始めたってこと？」

「どうですかねえ。ああ、刑事同士が話しているのをちよつと聞いたんですけど『最近は手口が雑だな。素人丸出しだよ。機械の性能にばかり頼って、あれじゃすぐにバレるさ』って」

なんとも嫌な言い回しだが、昔からやりなれたプロ的犯行ではないらしかった。

「この件、何かあるんですか？」

「ううん。ありがとね」

一瞬迷ったが、私が教え子であることは言わなかった。彼が不審に思い先生の経歴を調べれば、私が教え子であるということに気づくかも知れない。それならそれで構わないが、今自分から言う必要もない。

大きく深呼吸を一つ。覆っていた悪寒が消えて行く。そして、同時に別の思いが私を包み込んだ。

優しい先生がなぜ？―卒業して10年以上。人が変わってしまうには十分な時間だ。この私が中堅アウンサーとしてニュース番組を担当しているくらいなのだから、決して短い時間じゃない。

社交的な先生がなぜ？―それでも、人の根っこの部分はそう簡単には変わらない気がする。あの文化祭の時、男子を咎める先生の姿勢は本物だった。軽いイタズラ心で、人の心に深い傷を負わせてしまう。そのことから本気で彼らを救おうとしていた。

考えても答えなど見つからない。それでも、いや、だからこそ考えてしまう。

盗撮。テニス部。盗撮。顧問。盗撮。笑顔。正義。罪。時の流れ。変貌。欲望。盗撮。

「虚しさみたいなの、感じるよな」

ディレクターが声を掛けてきた。目の前にはコーヒーが置かれていた。

「生徒や保護者の信頼もある先生だった。でも、盗撮は犯罪。俺たちはその犯罪だけを報道する。世間ではそれが全て。盗撮教師。それが全てになっちゃう」

そう言って彼は私のデスクのPCを立ち上げた。映し出されたのはどこかの掲示板。すでに曽根先生についての書き込みで溢れていた。赴任していた高校名がめちやくちやだったり、担当教科が違ったり、新人時代から問題教師だったとか、明らか嘘もある。でも、それは私が事実を知っているから嘘とわかるだけのことだ。

「何が言いたいのか？」

感情的に言い放ち、彼を睨んだ。

彼は苦そうにコーヒーをすすつてから、とても穏やかな顔を見せた。

「罪は罪だが、知ってる奴は知ってる。ニュースには流れない彼を知っている。それでいいんじゃないかな」

知っている――私が教え子だと知っているのだ。

「自分にとつてどんな先生だったか、それは変わらないんじゃないかな」

知っている――どこで気がついたのか、私が教え子だと知っているのだ。

『お前はクリエイティブな仕事に向いてるんじゃないかと思うよ』つて、単純な俺はそう言われてこの仕事を選んだ。俺にとつては数少ない大好きな先生のまま。それも真実だ」

声が出なかった。

「この仕事をしていると物事に動じなくなる。というよりも、鈍くなるといった方がより正確かもしれない。それでも、やはり何事にも例外はあり、それが今日の前にあった。彼もまた曾根先生の教え子だったのだ。」

「何を外すの？」

「そうだなあ…何にする？」

本番前の会話。あの場違いの軽い言葉は、自分の平常を保つためだったのだ。

## 12 アナウンス

予定していたイベントが雨で流れた。司会進行役の私は「残念会」と銘打たれた飲み会に誘われたが、それは断った。大した理由はない。イベントは予備日が設定されているので、その日に打ち上げをやるのだから、今日は遠慮した。それだけだ。

とはいえ、部屋で一人ご飯。というのも気乗りがしない。行きつけの定食屋のノレンをくぐった。いわゆる昭和の香り漂うお店とでも言えばいいのだろうか。素朴で安くてボリュームある。そんな定食屋。客の多くは男性だけれど、「最近は女の子同士のお客さんも増えたね」とは、おかみさんの言葉だ。「だけど、女一人で来るのは由香里ちゃんくらいだよ」というのは、おやじさんの言葉。

近所だからというのもあるが、無駄な気を使う必要がなく、リラックスして食事ができるからお気に入りなのだ。料理の素材や盛り付けだけでなく、インテリアなどにもコンセプトを持ったお洒落感満載のお店で食事をして、平成という現代を生きる姿を演出することも大切だと思う。でも、お腹いっぱい飯を食らう！なら、こういうお店がなによりなのだ。

「雨、まだ降っているかい？」

おしぼりとお冷を持ってきたおかみさんが聞いてきた。

「小降りにはなりましたが、まだ」

そう言っておしぼりを手にする。温かいおしぼりが、少し冷えた指先に心地よい。

「今日は何にする？」

「今日のアジフライは最高だよ」

私が答える前に、おやじさんの声が飛んできた。

「じゃあ、それで」

私の注文はいつもこんな感じだ。

料理を待っている間、壁に掛けられたテレビを眺めた。平成な香りはこのテレビくらいか。当たり前となった薄型テレビもこの店では違和感のある不思議な代物のままだ。

偶然なのか、おかみさんの変な気遣いなのか、以前勤めていた局の夕方のニュースが流れていた。3年前までその地方局でアナウンサーをしていた。夕方のニュースを担当していたこともある。仕事が嫌いになったわけでも、人間関係が上手くいかなかったわけでもないが辞めた。あの仕事をしていると、良くも悪くも物怖じしなくなる。言いかえれば、五感が鈍くなる。

ある日のことだった。カメラマンが通勤途中で偶然出くわした交通事故の映像を確認していた。車同士の正面衝突で、運転手は共に死亡した事故だった。

「由香里さん、良く平気ですね」

背中から後輩アナウンサーの声がした。

「これくらいは大したことないでしょ。」

とモニターの中の惨事を指さしながら答えた。

「流石にそれを見ながら食事は出来ませんよ」

その声に、自分がミートソースのスパゲッティを食べながら見ていることに気がついた。そして、モニターにはアスファルトを染めてゆく血と肉片が大映しになっていた。

今思えば、その日から退社を考え始めた：そんな気がする。

「はい、お待たせね」

いつ来ても明るく、そして自然なおかみさんの声と共に「最高のアジフライ」が運ばれてきた。

「頂きます」

早速、ソースを垂らし、熱々を口に運ぶ。サクサクの衣が心地いい音を立てて、その中から青魚特有の香りとホクホクの身が溢れてくる。

「おやじさん、最高」

厨房の奥に叫んだ。

「あたりまえじゃないか！」

厨房の奥から帰ってきた。

こんなお店が減っていると聞く。ここはずっと残ってほしい。そのためには、小まめに足を運ぼう。思いを新たにしたい。

「あつ」

二匹目のアジに箸をつけた時だった。

「どうかした？」

おかみさんが飛んできた。アジに問題でもあったのではと思わせたのかも知れない。

「なんでもないです」

私はそう返すと、テレビの中の後輩を見つめた。

ご当地グルメを紹介する原稿を読むその表情に、私は驚きの声をあげたのだった。笑顔ではある。でも、完全に固まっている。笑顔のお面が張り付いていると言ってもいい。彼女を見るのは久しぶりだったので、今日だけのことなのか、最近はこうなのか、それはわからないが、悪い予兆であることは確かだ。

「また来ますね」

おかみさんにそう言って店を出ても、頭の中には彼女の笑顔が浮かんでいた。その笑顔には以前にも出会っている。退社を決める直前の私のそれだ。VTRでそれを見た時、それまで味わったことのない寒気が背中を走った。今も忘れられない。

「今夜、久しぶりに飲みに行かない？連絡待っているよ」

部屋に帰ると、彼女にメールを打った。時折こーやって誘って様子を見ようとしているのだけれど、なかなか彼女は誘いには乗ってこない。いつも「忙しいので」の決まり文句

を返してくる。

確かに私が在籍したところよりも多忙だとは聞いている。夕方のニュース、情報番組は視聴率競争が激しい。この不景気にスポンサーを獲得するには数字が何よりも大切で、内容も多岐に渡る。そのため、スタジオで原稿を読んで、ちよつとコメントすればいいという仕事ではなくなってしまった。

そんな事情を知っているから、彼女が「忙しいので」と返信をしてくると、それ以上返せない。

そんな事情を知っているからこそ、仕事から離れたい。一日の大半を局で過ごしてしまうような、そんな生活から引き剥がしたい。

昔は合コンみたいなことをして騒いだが、今ならそうではない。一緒にあの定食屋に行つて食事をして、同じ香りを持つ居酒屋でお酒を楽しみたいと思うのだ。そういう着飾らなくてもいい時間が彼女には必要なのだ。彼女は私よりずっと真面目で一生涯懸命で、センスもある。こんなところでつぶれてはいけない。

「お願い。返事をちょうだい」

握りしめたケイタイに話しかけた。もうとつくにアナウンス室に戻っている頃なのに返信がない。そのことが一層、私の思いを強くさせる。

私が新人の時、先輩が業務の合間を縫つて個人レッスンをしてくれた。当時はそれを「あたりまえ」のように：いいや、正直に言えば「やっかいな熱血」と感じていたが、自分がアナウンサーとして仕事をこなして行けば行くほど、その時間がどれだけ貴重なかを知った。最前線で働く先輩の1時間は、研修と雑用だけの新人のそれとは全く異なっていたはず。その先輩がレッスン最終日に言った言葉。最近それを良く思い出す。こんなもどかしい夜は、特に鮮明に蘇る。

「叱られる時間は限られている。だからちゃんと叱られなさい。甘えられる時間は限られている。だからちゃんと甘えなさい。そして、あなたが一人前になった時に、今度はあなたが先輩をちゃんと叱って、ちゃんと支えなさい。先輩から受けた恩は先輩に返す。そうやって思いはつながっていく。感謝はつながっていく。人はつながっていくの。永遠に」

## 【公演データ】

演劇団 S.O. プロデューサー 朗読劇・DOZEN【ダース】3rd

日にち…2013年4月21日(日)

会場…ライブハウス G i s i d e

出演…

北澤さおり(演劇団 S.O.)、辻優子(演劇団 S.O.)

朝田真由美、白柳友紀、村松風子

黒羽、田畑里沙、中島こーへー

飯塚愛佳(劇団「Z・A」)、木戸今日子(劇団「Z・A」)

太郎(演人#ラボワン)

スタッフ

作・演出…藤田ヒロシ

効果…木村佐与子

制作…レイコ

朗読劇 DOZEN 特設サイト

<http://eso.under.jp/dozen/>

演劇団 S.O. ウェブサイト

<http://eso.under.jp/>

※無断での使用・再配布・転載は禁止